

■（２０９）華やかだった岩手・釜石の昭和の火がまたひとつ消えた

棺の中の伊藤艶子さんはうっすら口を開き、ほほえんでいるようだった。岩手県釜石市の「最後の芸者」と呼ばれた伊藤さんは８日朝、最期を見守った家族らとともに、静かに火葬場に向かった。８９歳だった。華やかだった釜石の昭和の火がまたひとつ、消えた。

１９２６年生まれで、１３歳で芸の道に入った。終戦直前に釜石が連合軍から艦砲射撃を受けた際、市街地にある自宅を失った。戦後の復興と高度成長で「鉄とさかなとラグビーのまち」として栄えた釜石でも宴会は多く、約５０人の芸者いた。だが、製鉄所の高炉の火が消え、遠洋漁業が衰退すると活気が失われる。いつしか芸者は１人になった。そこに襲ってきた東日本大震災。伊藤さんは再び自宅を失った。それでも「芸だけは奪われなかった」と再び三味線を手にした。津波から逃げる大切さを歌う「スタコラ音頭」にも自ら踊りをつけた。音頭はしだいに、仮設住宅で、夏祭りで、被災者らに広まった。

戦争にも津波にも負けなかった。昨夏に会った際は「仮設は友達がいて楽しい」と語っていた。その前向きな生き方は記憶に刻まれ、釜石を永遠に元気づけるに違いない。（山）